

太宰府の文化財

369

梅花の宴

太宰府市民遺産第5号

「万葉集つくし歌壇」

市内のあちらこちらで梅の花がほころぶ季節です。梅は太宰府とゆかりの深い花で、市の花にもなっています。さまざまある太宰府と梅の関わりの中のひとつに、「梅花の宴」があります。

天平二（730）年正月十三日（新暦では二月八日）、当時の大宰帥（大宰府の長官）



大宰府展示館に展示されている梅花の宴人形
（公財）古都大宰府保存協会蔵



昨年の梅花の宴の様子（水城・大野城築造 1350年を記念して防人の歌がたりも行なわれました）

れ、梅花の宴の様子を知ることができません。

宴の列席者には、ホストである旅人を含めて32人の名が見え、順に一人一首ずつ歌を詠んでいきます。その中からいくつかを紹介します。

①正月立ち 春の来たならば
かくしこそ 梅を招きつつ
楽しき終へめ

（大意：正月になり春がきたので、このように梅を招いて楽しい日を過ごそう）

②わが園に 梅の花散る
ひさかたの 天より雪の
流れくるかも

（大意：我が家の庭に梅の花が散っている。それとも天から雪が流れているのであるうか）

③梅の花 散らくはいづく
しかすがに この城の山に
雪は降りつつ

（大意：梅の花が散っているというのはどこだろう。それはそれとして、この城の山には雪が降り続けている）

①はトップを飾った歌で、客人の中で最も位の高い大宰大式（大宰府の次官）・紀男人が詠みました。これから始ま

る歌会を盛り立てるにふさわしい歌です。②は大伴旅人が、③は大宰大監（大式の次の位）・大伴百代が詠んだもので、③

が②に対するかけ合いになっています。③の歌中の「この城の山」の「城」は大野城のことです。つまり四王寺山です。旅人の序文の中には、「膝を近づけ盃を飛ばす」とあって、列席者が親しく膝を寄せ合ってお酒を楽しむ様子もうかがえます。大宰府政庁の近くにあったと考えられる旅人の邸宅から、庭の白梅と四王寺山を眺めながら官人らが酒と歌を楽しむ光景を想像できるのではないのでしょうか。歌には物のような姿かたちはありませんが、太宰府を物語る大切な文化遺産と言えます。

この梅花の宴での歌を含め、大宰府やその周辺で詠まれたとされるものは『万葉集』に200首以上あり、当地での盛んな歌人の交流は「万葉集筑紫歌壇」と称されています。これらの歌と、歌に詠まれた大宰府の情景・歌人たちの物

語を後世に伝えようと、太宰府で万葉集講座や歌碑めぐりの活動が続ける大宰府万葉会によって、太宰府市民遺産「万葉集つくし歌壇」が提案されました。会では毎年2月に「梅花の宴」を再現する催しを行なってきて、今年で20回目を数えます。はるか遠い古代に詠まれた歌の数々が、引き継いで歌われ続け、今も人々に親しまれているのです。

文化財課 遠藤 茜

①③の歌は、①大宰府政庁跡西側、②太宰府天満宮境内の九州国立博物館エスカレーター入口横、③歴史スポーツ公園内、に歌碑が建っています。

※「城の山」を基肄城（基山）と解釈する説もあります。

●「第20回大宰府万葉梅花の宴」の詳細は、本号21頁や太宰府館HPをご覧ください。
●第6回太宰府市景観・市民遺産会議
日時：3月13日(日)午後1時
会場：九州国立博物館
ミュージアムホール